

梅花ばか  
(角光嘯堂かくみつしようどう)

短歌

鶯うぐいすの啼なく音ねゆかしく吾わが窓まどに

梅うめヶ香か送おくる春はるの朝あさ風かせ

園庭えんてい  
数枝すうしの梅うめ

寒かんに耐たえ馥郁ふくいくとして開ひらく

遙はるかに見みる千種せんしゆの雪ゆき

香かを慕しとう誰たれか何なんぞ求もとめん

作者略歴

京都壬生の儒家に明治二十四年十二月十一日に生まれた。九州小倉中学を経て九州大学国文科を卒業。漢学を大分日田の広瀬淡窓の塾で研究し、その後、二十年間、日本大学国文学の教授を勤めた。全国朗吟文化協会初代会長、淡窓流宜園調宗家・家元で文学博士。

解説 梅の花を賞賛する詩。

語釈 ※園庭Ⅱにわ。※馥郁Ⅱ 香気の盛んにかおるさま。よいかおりのいつばいに漂っているさま。※千種Ⅱ種類の多いこと。

通釈 庭に数枝の梅がある。寒さに耐え、良い香りを放ちながら開花した。遙か彼方を見ると、山々に様々な雪が確認され、人は梅の香りと寒さが相応する何かを望むのであろうか。